

あね さき ひがし はら  
市原市姉崎東原遺跡

1990

株式会社 新 昭 和 住 宅

財団法人 市原市文化財センター



## 序 文

市原市を南北に貫流する養老川の河口の左岸台地上には、姉崎古墳群が形成されております。千葉県指定の文化財であります、姉崎天神山古墳・姉崎二子塚古墳、また、市指定文化財であります鶴窪古墳をはじめとして数多くの古墳が残されている地域であります。かつての上海上国の国造の本拠地と目され、後には延喜式内社である姉崎神社も建立されました。このように姉崎地区一帯は、古代より文化が栄え、養老川左岸における中心的な役割を果たしてきたところであります。

今回調査いたしました、姉崎東原遺跡は、姉崎天神山古墳に隣接する遺跡で、民間の宅地造成に先行して、発掘調査を実施したものです。調査の結果、弥生時代の集落の一部と、古墳の一部が検出されました。とくに、弥生時代中期の土器が、まとまって出土したことは特筆すべきことと言えます。古墳群の形成に先行する集落の一端を示すものと考えられるからです。調査の面積自体、決して広いとは言えないものですが、地域一帯の歴史を復元していくうえで、今後不可欠の資料と位置づけられるのではないかと、思われます。

当市は現在、首都圏のベッドタウンとしてまたリゾート地として注目されているところであり、今後も様々な開発が行われることが予想されます。文化財の保護とこれらの開発との調和を如何に図っていくかが、これまで以上に重要な課題となってくると言えます。また、これまでの成果を市民の方々に還元していくための活動も、さらに充実させていく必要もあります。

本報告が、当市にとどまらず房総の古代文化の研究、解明のための資料として、同時に文化財の理解、保護のための資料として大いに活用されるよう期待しています。

最後に、調査にあたり多大な御協力をいただきました、千葉県教育庁文化課、市原市教育委員会文化課、地元の皆様方に厚くお礼申しあげます。

財団法人 市原市文化財センター  
理事長 星 野 一 郎



# 例 言

1. 本書は千葉県市原市姉崎地区の宅地造成に先行して実施した埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. 本書に所収する内容は、千葉県市原市姉崎字東原2711-1他に所在する姉崎東原遺跡についての調査報告書である。
3. 発掘調査は、株式会社 新昭和住宅の委託を受け、千葉県教育委員会、市原市教育委員会の指導のもと、財団法人市原市文化財センターが実施した。
4. 調査対象は、古墳1基、650㎡であった。
5. 発掘調査、整理作業は、下記の通りに行った。

発掘調査	昭和62年11月2日～昭和62年11月12日	担当	木對和紀
整理作業	平成2年1月16日～平成2年1月25日	担当	高橋康男
6. 本書の執筆、作成は高橋が行った。
7. 市原市文化財センター調査コードは、セ64である。

## 市原市文化財センター組織表

### 昭和62年度(調査)

役員		調査課	
理事長	星野一郎(教育委員会教育長)	課長	清藤一順
副理事長	大野 皎(教育委員会教育指導部長)	主 幹	石田広美
常務理事	岩見一民(専任)	主 幹	加藤正信
理事	滝口 宏(早稲田大学名誉教授)	主任調査研究員	宮本敬一
理事	寺村光晴(和洋女子大学教授)	主任調査研究員	米田耕之助
理事	海上信久(姉崎神社宮司)	調査研究員	田中清美
理事	松崎良一(市企画部長, 62, 6, 14まで)	調査研究員	大村 直
	飯山英夫(市企画部長, 62, 6, 15より)	調査研究員	浅利幸一
理事	宮崎芳雄(市総務部長)	調査研究員	近藤 敏
理事	地引希壹(市都市部長)	調査研究員	高橋康男
理事	松下隆(市財政課長, 62, 6, 14まで)	調査研究員	田所 真
	安藤隆一(市財政課長, 62, 6, 15より)	調査研究員	木對和紀
監事	白鳥一夫(市会計課長, 62, 6, 14まで)	調査研究員(囑託)	田中新史
	元吉末喜(市会計課長, 62, 6, 15より)	調査研究員(囑託)	半田堅三
監事	河野徳三(教育委員会総務課長)	事務員(囑託)	高浦貞子
		事務員(囑託)	田中 裕子
<b>職員</b>			
庶務課			
課長	田丸萬富		
主 事 補	大鐘光江		
事務員(囑託)	秋田晴美		
事務員(囑託)	石渡あゆみ		

## 平成元年度(整理)

### 役員

理事長	星野一郎(教育委員会教育長)	課長	矢戸三男
副理事長	大野義規(教育委員会社会教育部長)	係長	宮本敬一
常務理事	須田昇三(専任)	主任調査研究員	田中清美
理事	滝口宏(早稲田大学名誉教授)	主任調査研究員	浅利幸一
理事	寺村光晴(和洋女子大学教授)	調査研究員	大村直敏
理事	海上信久(姉崎神社宮司)	調査研究員	近藤康男
理事	根本正夫(市企画部長)	調査研究員	高橋和紀
理事	宮崎芳雄(市総務部長)	調査研究員	木對成
理事	地引希壹(市都市部長)	調査研究員	忍澤茂
理事	安藤隆一(市財政課長)	調査研究員	田中良
監事	佐久間章(市会計課長)	調査研究員(嘱託)	田中新
監事	小宮仁(教育委員会総務課長)	調査研究員(嘱託)	半田堅
		事務員(嘱託)	高浦貞子

### 職員

#### 庶務課

課長	田丸萬富
主事	補大鐘光江
事務員(嘱託)	秋田晴美(元, 9, 30まで)
事務員(嘱託)	石渡あゆみ

### 目次

序文

例言

(財)市原市文化財センター組織表

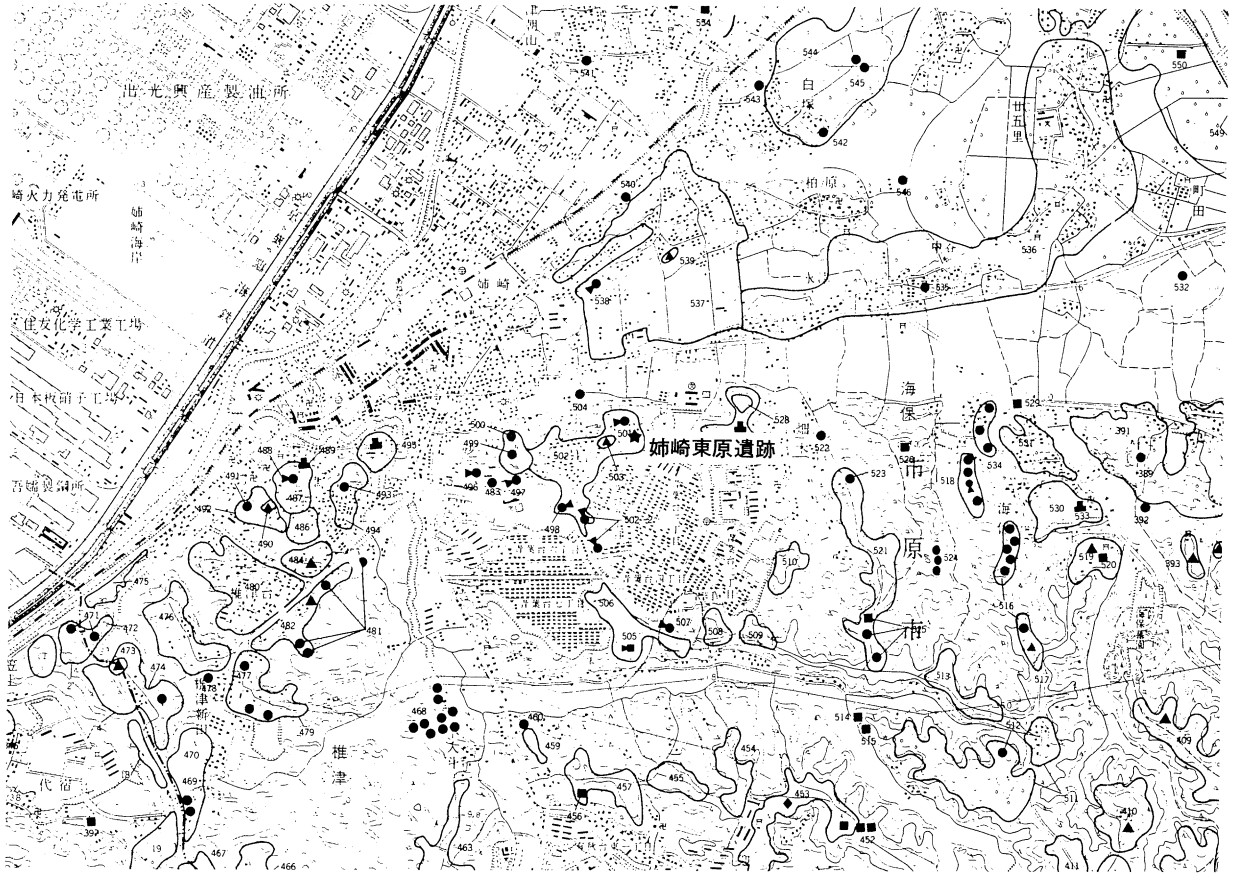
1、遺跡の位置と環境	2
2、調査の概要	2
3、調査した遺構と遺物	3
1)北区	3
2)南東区	4
3)南西区	18
4)その他の遺物	19
4、まとめ	20

### 挿図目次

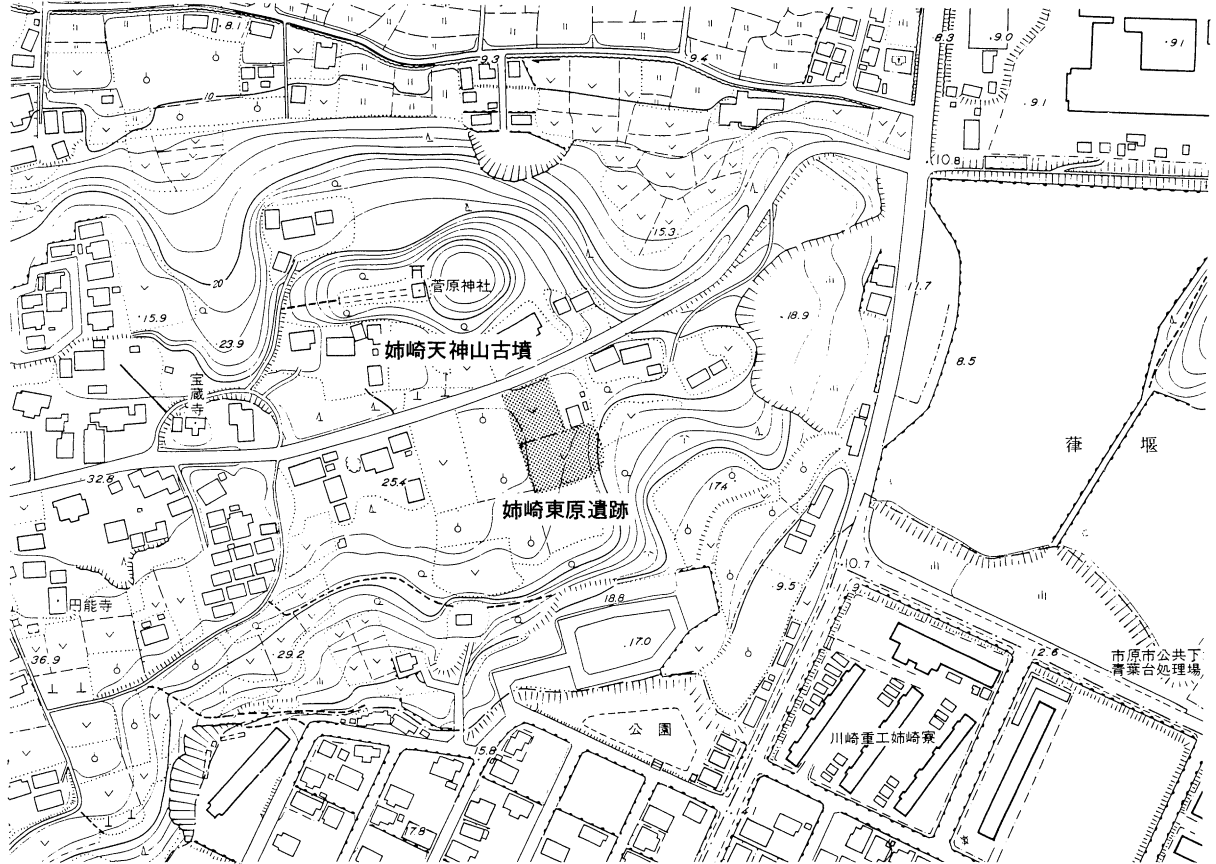
第1図	姉崎東原遺跡と周辺の遺跡	1	第13図	017出土遺物実測図	11
第2図	姉崎東原遺跡と姉崎天神山古墳	1	第14図	008A住居跡実測図	12
第3図	調査区割とグリッド設定図	2	第15図	008B住居跡実測図	13
第4図	001円墳・002実測図	3	第16図	014住居跡実測図	14
第5図	001出土遺物実測図	3	第17図	014出土遺物実測図	15
第6図	南東区遺構配置図	4	第18図	009土坑実測図	15
第7図	007・017住居跡実測図	5	第19図	010土坑実測図	16
第8図	007遺物出土状況実測図	6	第20図	溝状遺構配置図	17
第9図	007出土遺物実測図(1)	7	第21図	021出土遺物実測図	18
第10図	007出土遺物実測図(2)	9	第22図	020土坑実測図	18
第11図	007出土遺物実測図(3)	10	第23図	その他の出土遺物拓影図	19
第12図	007出土遺物実測図(4)	11			

### 表目次

第1表	001出土遺物観察表	4	第4表	014出土遺物観察表	15
第2表	007出土遺物観察表	6・8	第5表	021出土遺物観察表	18
第3表	017出土遺物観察表	10			



第1図 姉崎東原遺跡と周辺の遺跡 (s = 1 / 37500)



第2図 姉崎東原遺跡と姉崎天神山古墳 (s = 1 / 3750)

## 1. 遺跡の位置と環境

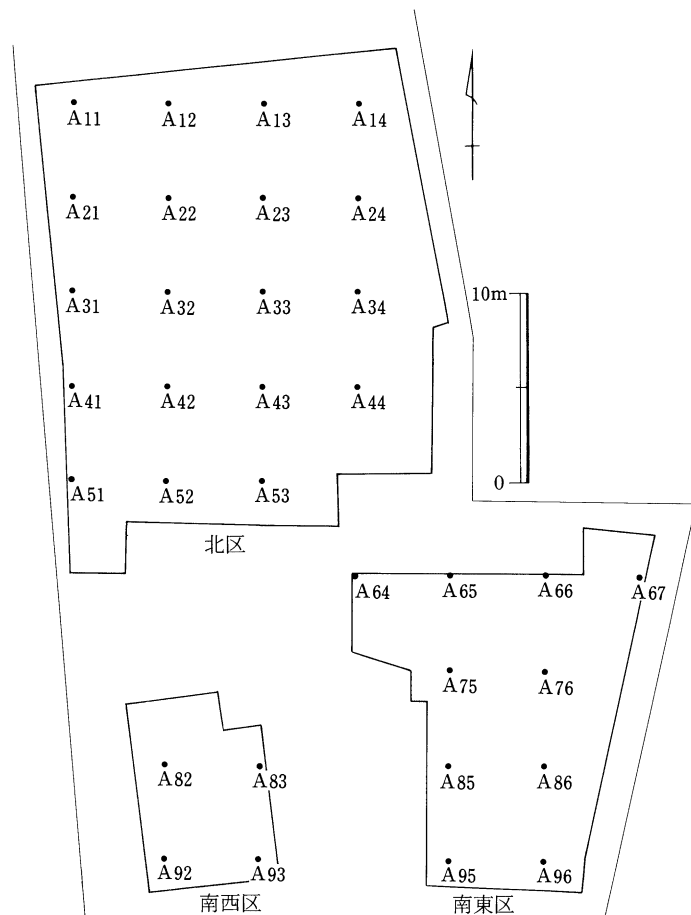
姉崎東原遺跡は、市原市姉崎字東原2711-1他に所在する。養老川左岸の標高約30mの台地上であり近くには、千葉県指定文化財である、姉崎天神山古墳が存在する。この付近一帯は、姉崎古墳群と呼ばれ、上海上の国造の本拠地と目されている所である。弥生時代から古墳時代にかけての遺跡の分布がひろく認められる。第1図に見られるとおり、本遺跡の周辺には大規模な前方後円墳が密集している。496は山王山古墳、497は釈迦山古墳、498は鶴窪古墳、501が姉崎天神山古墳、505は六孫王原古墳、低地の方に目を転じると、538の姉崎二子塚古墳が存在する。また、これらの古墳群形成の前段階の集落として506の毛尻遺跡がある。さらに、これらの古墳に囲まれるかたちで、式内社である姉崎神社が存在する。この神社の出現の背景については、当該時期の集落の調査例がほとんどないところから、不明な点が多い。古墳群の形成とは時期を隔てており、伝承上でつながりがあるとされる島穴神社が低地上にあること等も考慮に入れる必要があろう。ただし、低地への進出を視野に入れるのはこの時期に限った事ではなく、本年度に調査を実施した、姉崎上野合遺跡では安行2式の土器が出土している点等もみのがせない、また、姉崎二子塚古墳が低地上に存在するのは言うまでもない。今後は低地の調査が活発になる傾向にあり、ますます台地上の開発の問題と低地の開発の問題を総合的に捉える必要が増大してくると思われるが、それには海水準の変動等、自然環境の復元が不可欠になってくると考えられる。そのような検討を通して、養老川両岸における古墳群の展開の相違もより明らかになるのではないかとと思われる。

## 2. 調査の概要

既に述べた通り、本遺跡は姉崎古墳群の一角を占め、調査区内には土器片が多く散布していた。また、姉崎天神山古墳に隣接するところから、関連する時期の遺構の検出も大いに予想されるところであった。

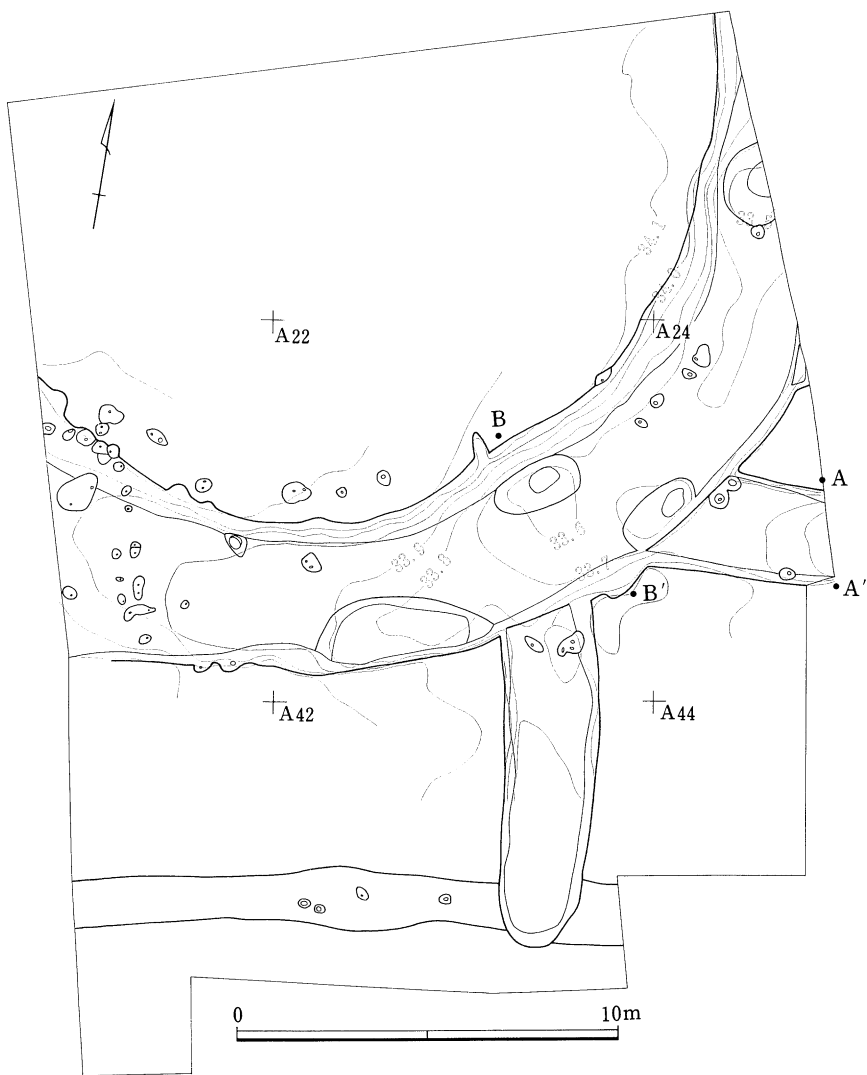
調査は、遺構の存在が認められた部分を拡張する方式で行い、結果的には、古墳の周溝が検出された北区、住居跡が密集して検出された南東区、土坑およびピット列が検出された南西区に分かれた。

遺構は、比較的密度が濃く検出されたが、耕作の影響が及んでいる部分が多く残存状況は必ずしも良好ではなかった。遺構の確認面も一部においてはハードロームに達しているような状況であった。それにもかかわらず、後に触れるように弥生時代中期宮ノ台式の良好な一括資料が得られた事は特筆に値するといえる。



第3図 調査区割とグリッド設定図(s = 1/400)





なお、調査区全域をカバーする形で5mピッチの小グリッドを設定した。整理については通常の方法によっている。

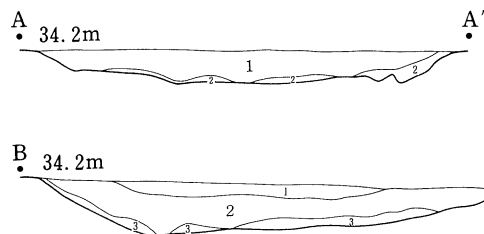
### 3. 調査した遺構と遺物

#### 1) 北区

この調査区では、円墳の周溝の一部と、直線的な溝が2条検出された。この直線的な2条の溝はあるいは本来同一のものであった可能性が強いが、時期等については、良好な遺物の出土もなく不明である。

#### 001号円墳

推定で、直径20mにおよび、周溝の幅は上端で約4mを計る。周溝の深



#### 001円墳、002

A-A'

1. 黒褐色土 ローム粒多い。粗いローム粒若干含む
2. 明褐色土 ローム粒非常に多く含み、径1~3cmのロームブロックを多く含む

B-B'

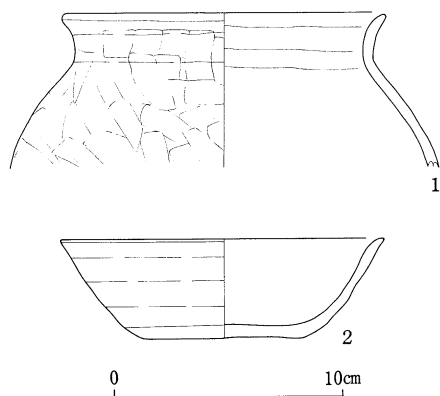
1. 暗褐色土 ローム粒若干混える。粗い堆積。002~003の覆土
2. 黒褐色土 A-A'の1に対応
3. 暗褐色土 A-A'の2に対応

第4図 001(円墳)、002(方墳?)実測図(s=1/200)

さは、確認面から約50cmと比較的浅く、立ち上がりも緩やかである。主体部は確認されず、周溝からも共伴すると断定しうる遺物の出土はなかった。図示した遺物は、周溝の覆土から出土したものである。

#### 002 003 溝状遺構

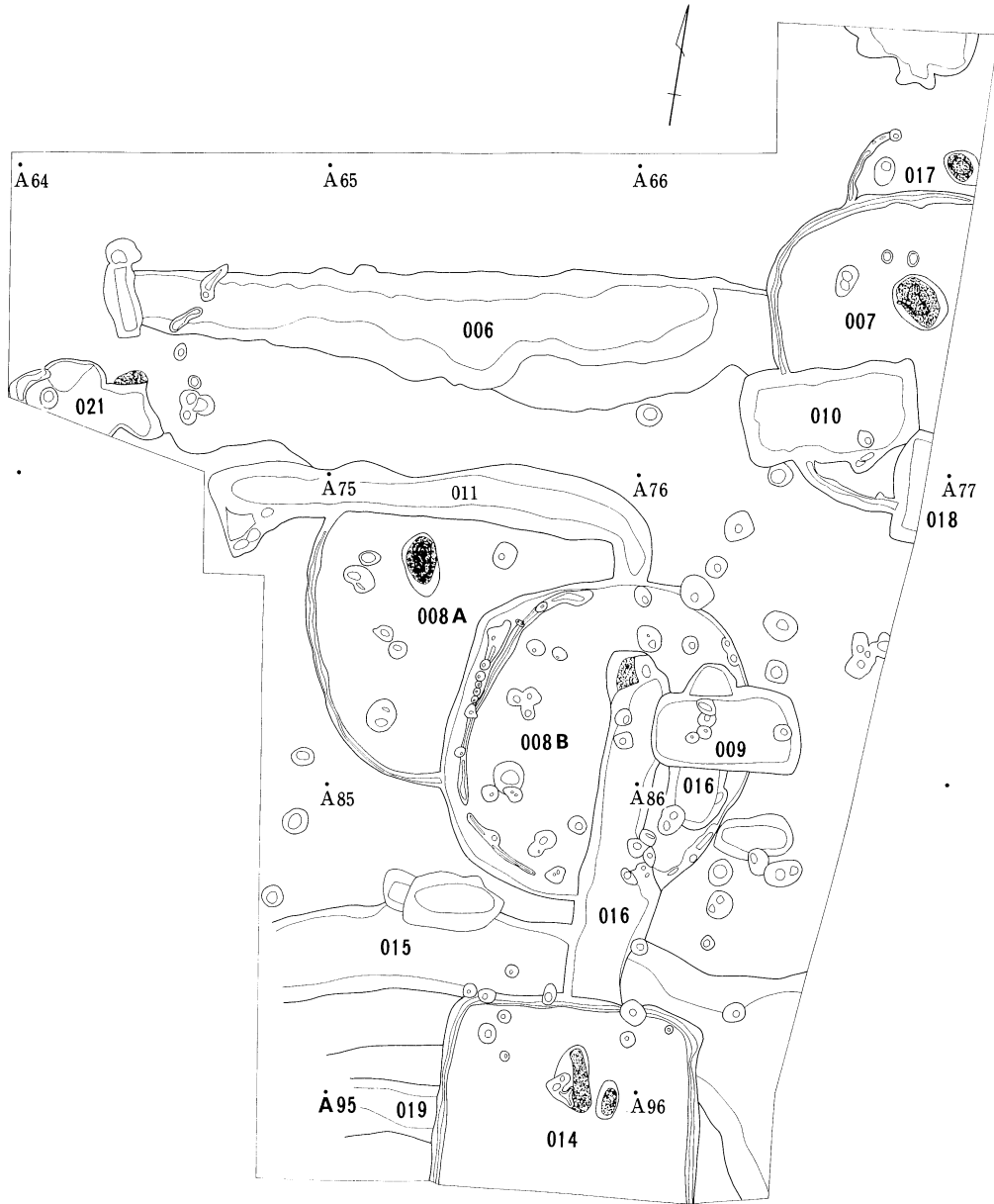
共に幅約2mで、ほぼ直行し、それぞれの延長部分が001の周溝内には認められないところから、方墳の周溝の可能性が高い。ただし、遺物の出土は認められなかった。



第5図 001出土遺物実測図

第1表 001 出土遺物観察表

No.	種類	器種	部位	法量・形態の特徴	技 法	胎 土	色 調		備 考
							内 面	外 面	
1	土師	甕	口縁	口径12.8	内面:横位のナデ 外面:右下りのケズリ	やや微砂粒 多い	赤褐	黒褐	内面に黒斑あり
2	土師	坏	完形	器高4.0口径13.0底径 6.4	内面:ヨコナデ 外面:ヨコナデ・回転ヘ ラケズリ(底部外周・底 部)	比較的精良	赤褐	赤褐	ロクロ土師

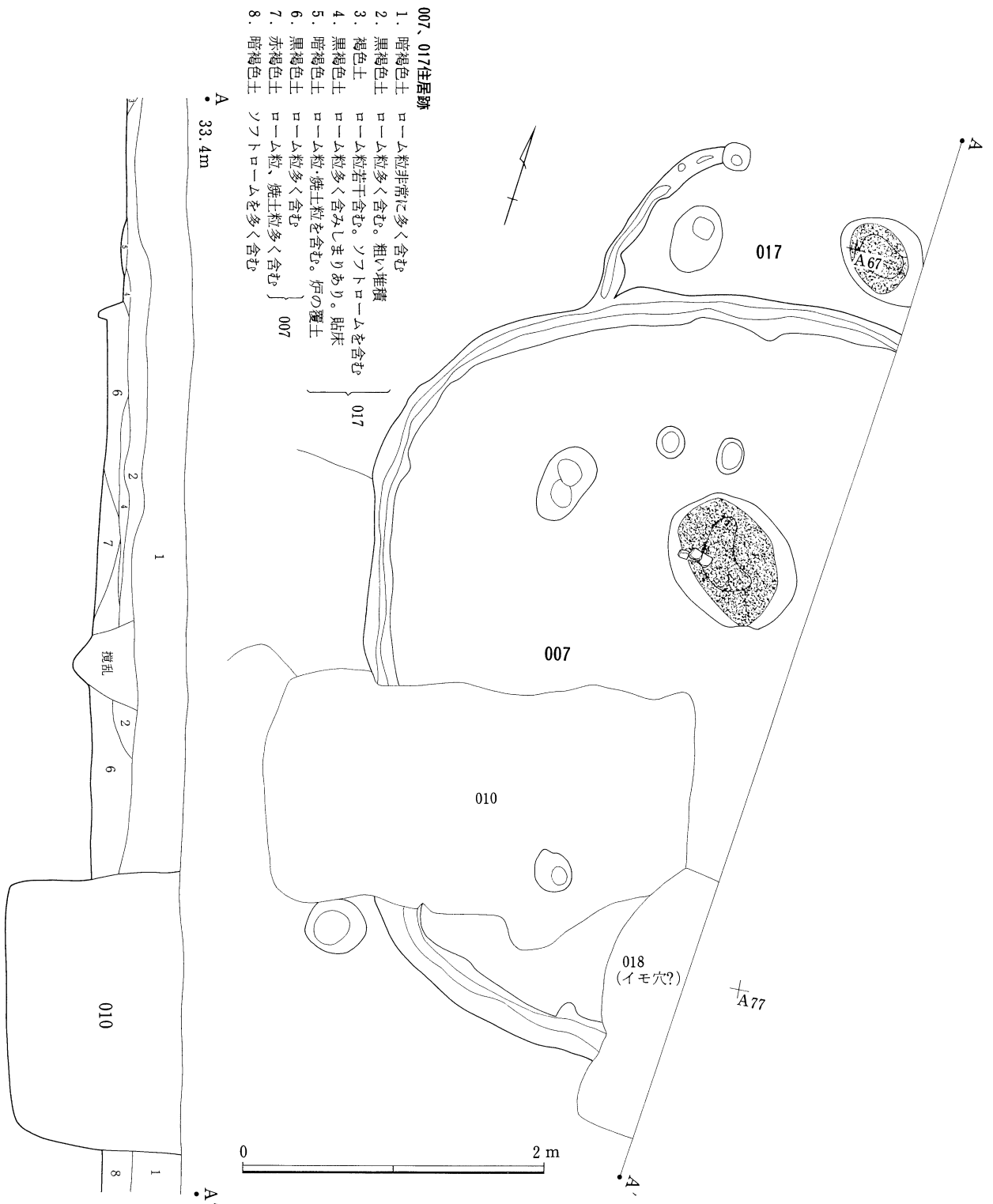


第6図 南東区遺構配置図

0 5m

## 2) 南東区

上図に見るように、住居跡と土坑、溝状遺構が交錯して検出された部分である。概して、遺物の出土は少なかったが、007住居跡からは先に述べたように、宮ノ台式の良好な一括資料が出土している。後期への過渡的な様相を示す資料である。



第7図 007・017住居跡実測図(s = 1 / 40)

007 017 住居跡

ともに、本区域の北東寄りの部分で検出された。いずれも、東半部分は、調査範囲外に至っている。両者の新旧関係については、017の張り床が007の覆土上で検出されており、017の方が新しい。017は、周溝の一部と、炉址、柱穴1が検出されたのみで、全体の形状は復元し難い。



第 8 図 007住居跡遺物出土状況実測図 (s = 1 / 20)

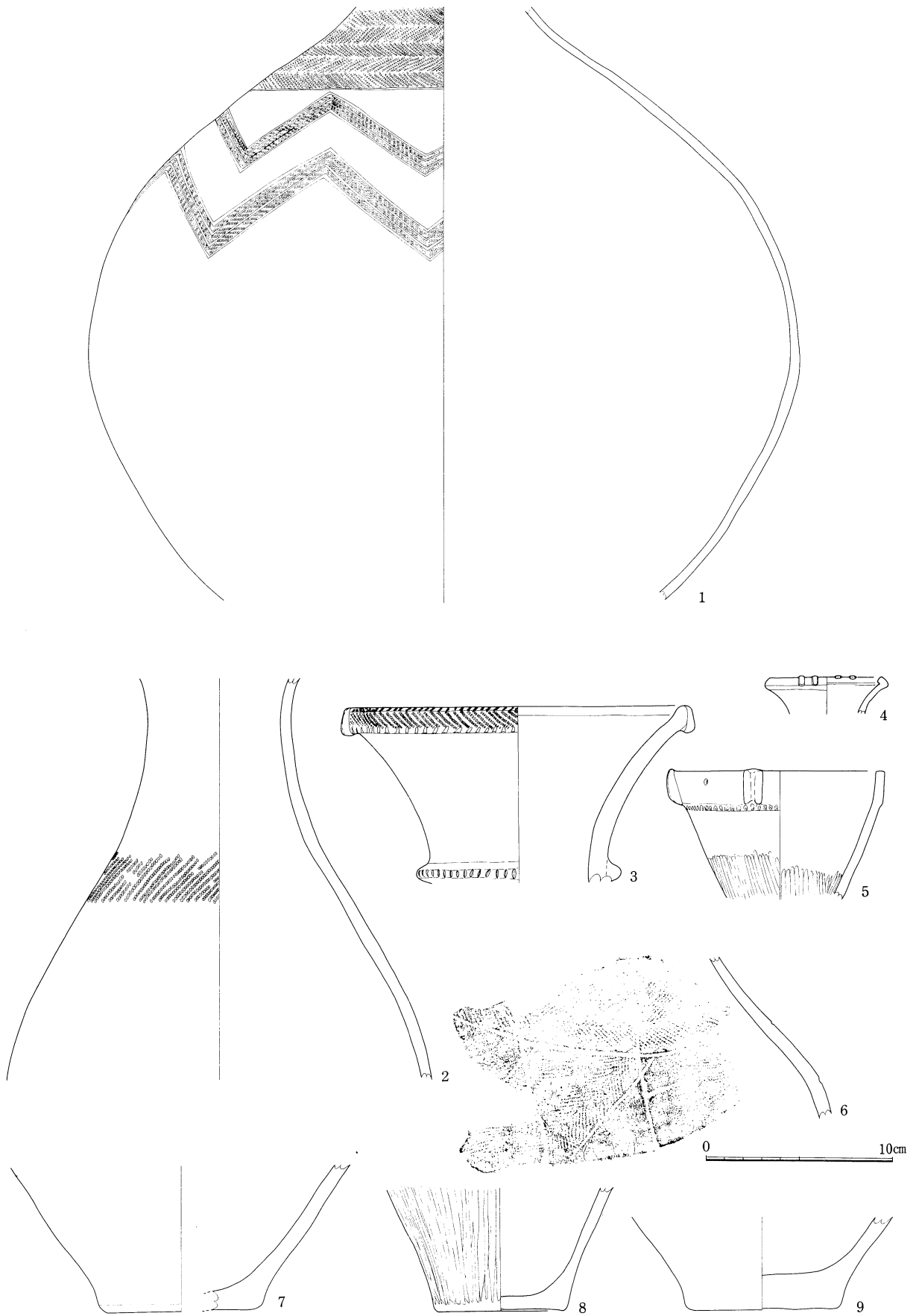
敢えて、行わないこととする。一括して廃棄された状況が認められるかぎり、それを時期毎に分類する事の必要性を感じられないのである。当然、形態あるいは文様の相違等はそれ自体、その出現の時間的相違を内包するものではある。しかし、出現の時間差が使用、廃棄の時間差に通じる保証はないと考えるべきであろう。いかに多様な共伴関係が認められるかを、明らかにしていくべきではないかと考える次第である。編年表の細分は、あくまで諸形式の出現序列を緻密にしていくことにすぎない

007 は長径約 5 m、短径約 5 m の小判型を呈し、炉址は中央ほぼ北寄りに存在する。南側を土坑 010 および 018 に切られている。柱穴は西側の 2 箇所が検出されているが、南側の柱穴は 010 の底面で検出されたものである。この西側の柱穴の心心間は約 2.7 m である。

この住居跡の覆土中から、図示したような状態で、遺物が出土している。個体毎の特徴については観察表に譲ることとするが、中期から後期にかけての過渡期的様相を示している。あるいは、これら土器群を分類して時期毎に分けることも可能かもしれないが、その事によって一括資料としての特性が失われることになりかねないので、そのような作業は

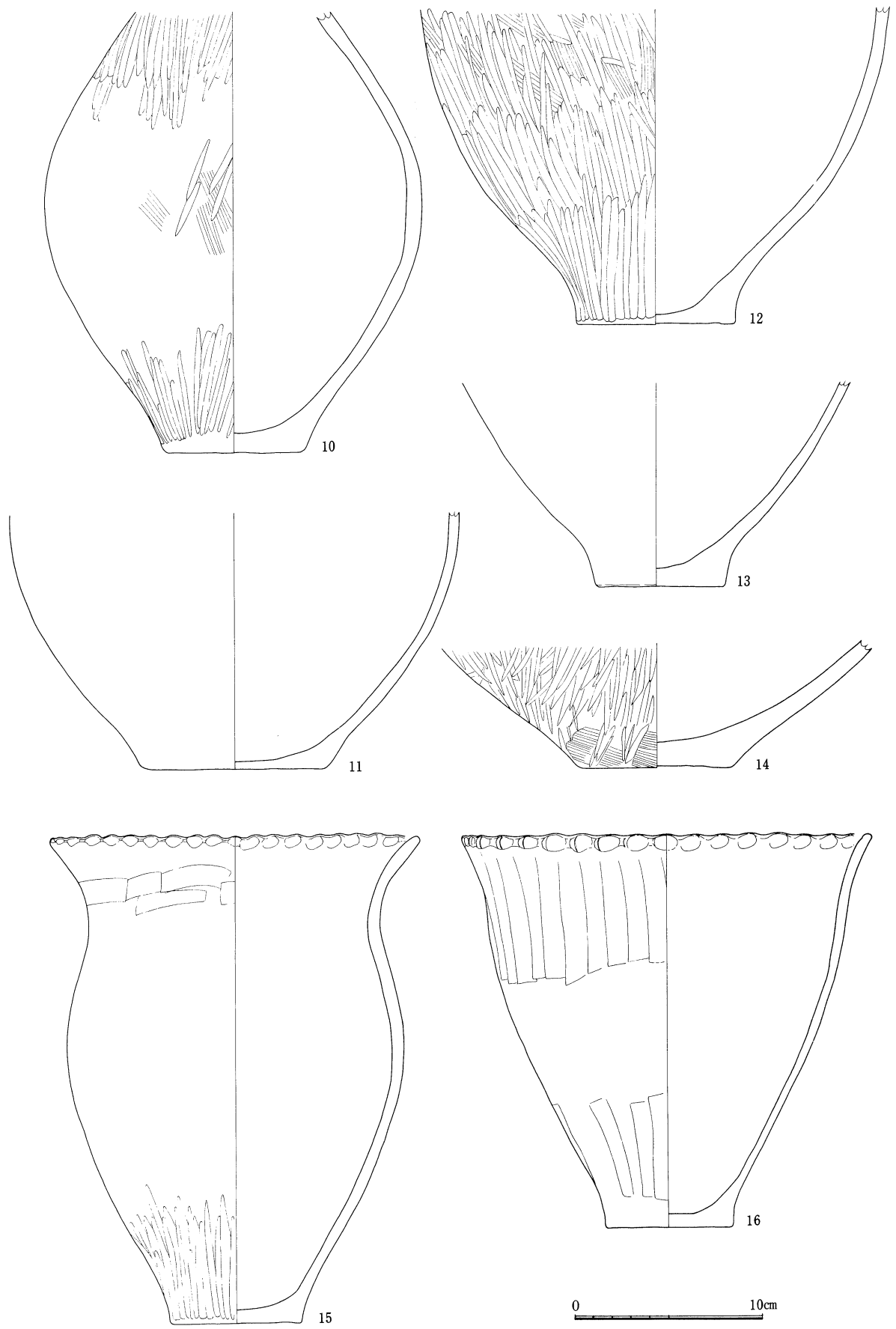
第 2 表 007 出土遺物観察表

No.	種類	器種	部位	法量・形態の特徴	技 法	胎 土	色 調		備 考
							内 面	外 面	
1	弥生	壺	胴	胴径 38.0 5 段の羽状縄文。下端は沈線により区画 山形文は 2 列 7 単位各単位は沈線により 3 分割 右上りの部分には横位に、右下りの部分は縦位に縄文	内面: 全面丁寧なナデ 外面: 文様間は沈線方向を平行のミガキ、それ以外はやや左傾した垂直方向のミガキ	比較的精良	灰褐～暗褐	赤褐	外面 縄文施文部以外赤彩
2	弥生	壺	頸～胴	無区画の帯状縄文 1 単位	内面: 丁寧なナデ。縦位のナデ 外面: 丁寧なナデ	わずかに砂粒含む	暗褐	暗褐	内面にモミガラ痕 外面部分的に黒斑
3	弥生	壺	口縁～頸	口径 17.8 頸径 11.0 口唇部、口縁部に縄文の下端はキザミを巡らす。棒状付文 2 箇所残存。頸部には隆帯。その上にキザミ	内面: 垂直方向のミガキ・ナデ 外面: 無文部は垂直方向のミガキ	砂粒多く含む	暗褐	暗褐	器壁内部は黒褐色
4	弥生	小形壺	口縁	口径 6.0 口縁部に 2 個 1 単位の付文	内外面とも横位のナデ	比較的精良	明褐	明褐	
5	弥生	壺	口縁	口径 11.4 口唇部細い縄文の押捺。棒状付文 5 個。付文上に浅いキザミ。有段部下端に刺突。口唇部直下に焼成前の穿孔一対。	内外面とも頸部下に垂直方向のミガキ	微砂粒を含む	赤褐	赤褐	内外面共に赤彩

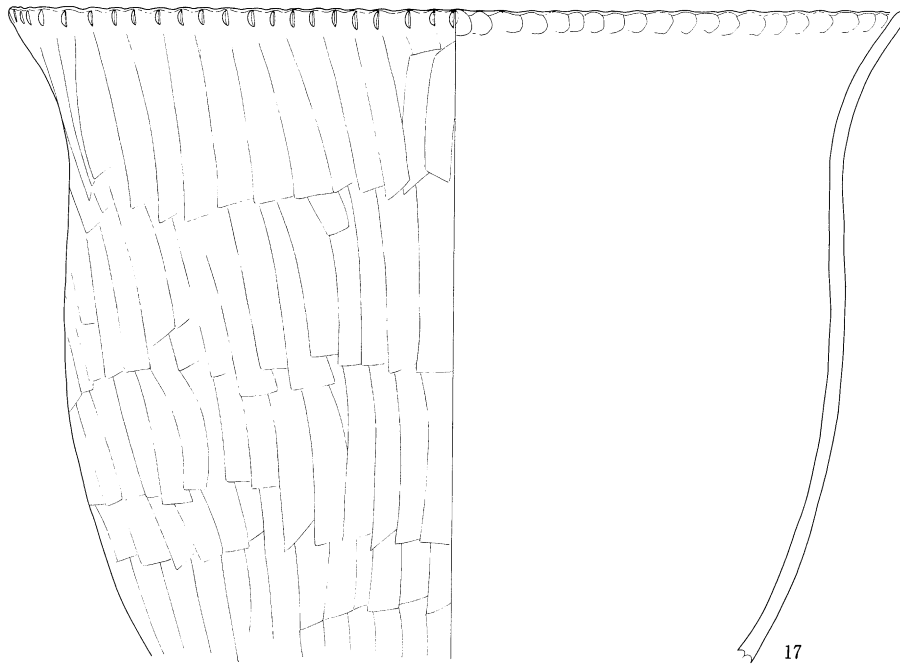


第9图 007出土遺物実測図(1)

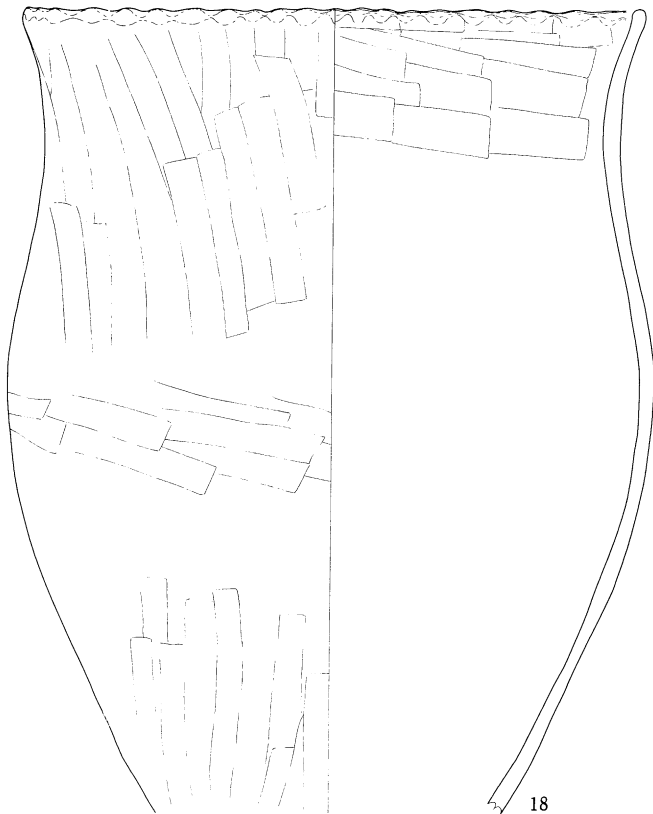
No.	種類	器種	部位	法量・形態の特徴	技 法	胎 土	色 調		備 考
							内 面	外 面	
6	弥生	壺	胴	二単位一組の羽状縄文. 2段の沈線区画の下方 に5単位の羽状縄文. 次線による区画					
7	弥生	甕	底	底径8.0	内面:ナデ 外面:垂直方向のミガキ か?(器面の摩耗著しい)	砂粒多く含 む	橙	黒褐~暗 褐	
8	弥生	甕	底	底径6.6	内面:不明瞭 外面:胴部は垂直方向の ミガキ。底部は不定方 向のケズリ	砂粒多く含 む。小礫わ ずかに含む	暗赤褐	暗赤褐	
9	弥生	甕	底	底径7.6	内面:横方向のナデ・不 定方向のケズリ 外面:丁寧なナデ・底部 は不定方向のナデか	比較的精良	灰褐	灰白褐	
10	弥生	壺	胴~底	底径7.0	内面:ナデ 外面:垂直方向のミガキ ・ハケ→部分的なミガキ、 垂直方向のミガキ。底 部の整形は不明瞭	砂粒含む	暗赤褐	暗赤褐	
11	弥生	壺	胴~底	底径9.0	内外面共、磨耗著しく 整形等不明瞭 外面胴部下半に右下り の整形の痕跡あり(ハケ か?)	暗赤褐の粒 子含む	暗赤褐	暗赤褐	焼成甘い 内外面共、黒斑あり
12	弥生	甕	胴~底	底径8.2	内面:横方向のナデ 外面:ハケ→ミガキ・ミ ガキ・底部は不整方向の ケズリ	比較的精良	灰~黒褐	暗赤褐	内面にススの付着あり 外面に黒斑あり
13	弥生	甕	胴~底	底径7.0	内面:丁寧なナデ 外面:タテ方向のケズリ	砂粒含む	黒褐	暗赤褐	
14	弥生	甕	底	底径8.0	内面:横方向の丁寧なナ デ 外面:ハケ→ミガキ・底 部は不整方向のナデ	比較的精良	暗赤褐	暗赤褐	
15	弥生	甕	完形	器高26.0、口径19.6、 底径6.8口縁部を指頭に より押圧	内面:横方向のナデ・右 下りのナデ・以下不明瞭 外面:横方向のケズリ・ ミガキ	砂粒含む	明褐~暗 褐	明褐~暗 褐	口縁部内面および外面胴 部上半に黒斑
16	弥生	甕	完形	器高21.0、口径22.0、 底径6.6口縁部を指頭に より押圧	内面:丁寧なナデ 外面:タテ方向の弱いナ デ・タテ方向のハケのち ナデ(不明瞭)・タテ方向 のハケ	砂粒含む	暗褐	暗褐	内面胴部上半にスス付着 006出土破片と複合
17	弥生	甕	口縁~ 胴下半	口径35.4 口縁部を爪により押圧	内面:丁寧なナデ 外面:タテ方向のケズリ	比較的精良	暗赤褐	暗赤褐	外面スス付着
18	弥生	甕	口縁~ 胴下半	口径24.4	内面:水平方向のハケ・ 丁寧なナデ 外面:垂直方向のハケ・ やや右下りの横方向の ケズリ・タテ方向のケズ リ	砂粒多く含 む	暗褐	赤褐	焼成やや甘い
19	弥生	甕	口縁~ 胴下半	口径15.6 口縁部を指頭により押 圧	内面:横方向のハケ 外面:タテ方向のハケ	砂粒含む	赤褐	赤褐、黒 褐	内面のハケは口縁部押圧 以前
20	弥生	甕	胴~底	底径6.0	内面:タテ方向のミガキ ・丁寧なナデ 外面:タテ方向のケズリ ・底は不整方向のケズリ	比較的精良	暗褐	黒褐	
21	弥生	甕	口縁~ 胴下半	口径30.8 口縁部を指頭により押圧	内面:横方向のナデ・や や右下りのナデ 外面:右下りのハケ	比較的精良	暗褐~赤 褐	暗褐~赤 褐	



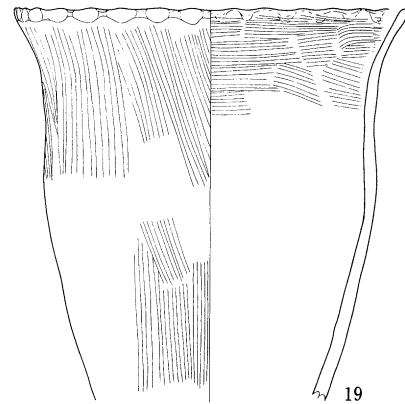
第10图 007出土遺物実測図(2)



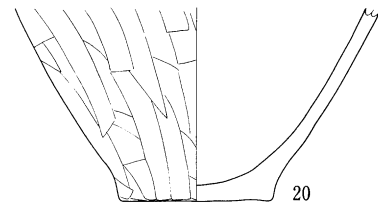
17



18



19



20

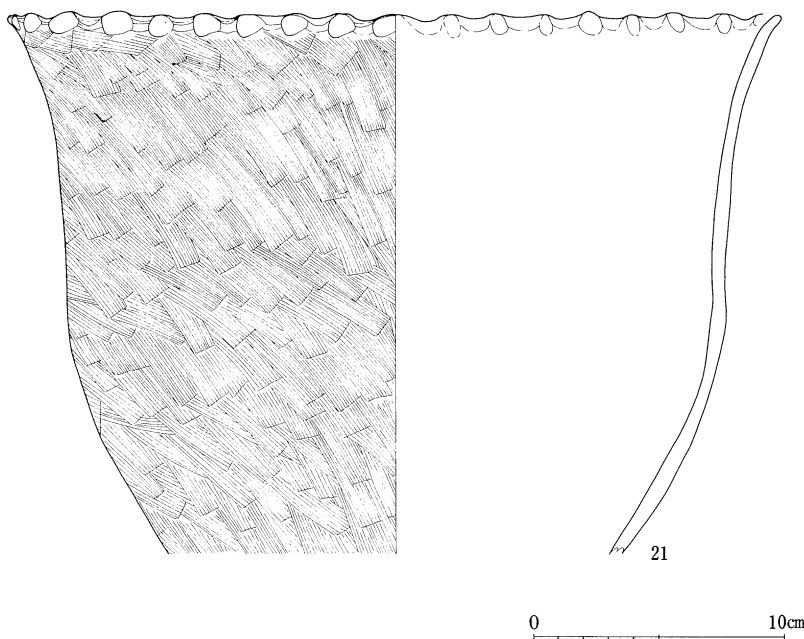
0 10cm

第11図 007出土遺物実測図(3)

第3表 017 出土遺物観察表

No.	種類	器種	部位	法量・形態の特徴	技法	胎土	色調		備考
							内面	外面	
1	カワラケ	小皿	完形	器高2.2口径8.0底径4.6	内面:不明瞭 外面:体部下半ヘラケズリ	砂粒多く含む	橙	橙	焼成やや甘い
2	カワラケ	小皿	底	底径3.6	内面:ヨコナデ 外面:ヨコナデ・回転ヘラケズリ(?)	砂粒多く含む	橙	橙	焼成やや甘い





第12図 007出土遺物実測図(4)

のである。この点を見落としていると、編年の細分の進行とともに、同一時期の遺構が減少する結果となるであろう。極端な話になるが、一遺構一時期という事につながりかねず、集落の把握ができなくなることになると思われる。したがって編年の細分化を進めるのと並行して、多様な共伴関係も、実体として位置づけ続けて行くという方向が必要なのではないだろうか。多様な共伴関係を排除しないような、編年のありかたをさらに追求していくことが、今後、求められていくのではないだろうか。なお、017からは図のようなカワラケが出土した。遺構に伴うとは考えられないが、報告しておく。

#### 008A 住居跡

本調査区の中央やや西寄りに存在し、北端は溝状遺構011により切られている。008B 住居跡と重複関係があり、同住居の覆土の西部分に本住居跡が存在する。従って、調査においては、張り床部分の範囲を捉えることはできたが、周溝の痕跡は把握出来なかった。また、柱穴は008B の調査の際に南東部分が検出されており、ほぼ全体の規模の復元は可能である。柱穴間は4辺とも約2.4mである。炉址は北側の2つの柱穴間のやや西寄りの部分で検出されている。

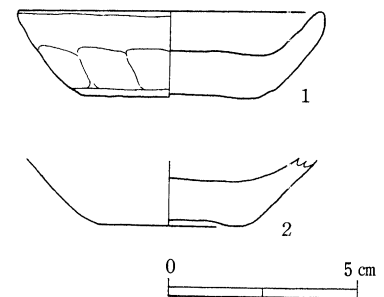
本遺構からは良好な遺物の出土は認められなかった。

#### 008B 住居跡

上述の008A 住居跡の下層に位置するものであり、本調査区のほぼ中央に位置する。遺構のほぼ中央を南北に溝状遺構016が貫いており、これが炉址の一部を壊している。また、東側には土坑009がある。本住居跡の周溝は西側部分でほぼ半周するのが明瞭に捉えられた以外には、はっきりとは捉えられなかった。また、この周溝と壁の立ち上がりの部分は比較的広くなっており、小規模な拡張があったと考えられる。この拡張に伴うと思われる、柱穴の位置の移動も認められる。

形態的には、拡張前が長径約5.2m、短径約4.4mの小判型を呈し、拡張後は長径約5.6m、短径約4.8mで北西隅がわずかに突出する形態を呈するに至るが、基本的には小判型を踏襲している。

本住居跡からも、良好な遺物の出土は認められなかった。



第13図 017出土遺物実測図



第14図 008A住居跡実測図(s = 1/40)

008A住居跡

B-B'

1. 暗褐色土 ロームブロック、ローム粒、焼土粒を若干含む
2. 暗褐色土 ローム粒、焼土粒、炭化粒を含む
3. 褐色土 ロームブロック、ローム粒を多く含む
4. 暗褐色土 ローム粒を多く含む
5. 暗褐色土 ローム粒を含む。壁溝覆土
6. 暗褐色土 ローム粒、ロームブロック多量に含む。炭化粒を含む。しまりあり。貼床
7. 暗褐色土 ローム粒、ロームブロックを含む。008B覆土

A-A'

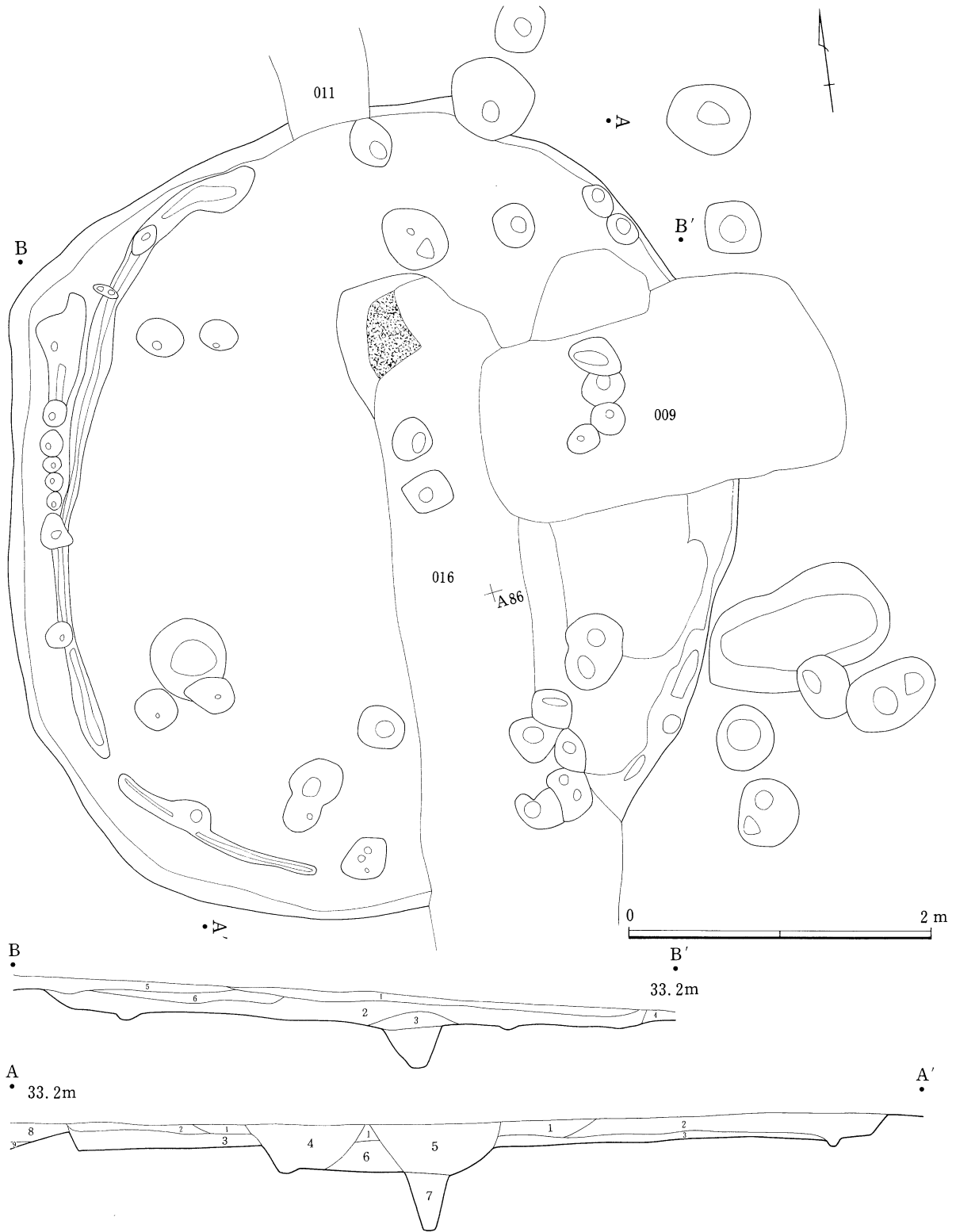
1. 暗褐色土 ローム粒含む
2. 赤褐色土 焼土粒多く含む
3. 暗褐色土 ローム粒若干含む
4. 褐色土 ローム粒若干含む。しまりあり
5. 明褐色土 ローム粒多く含む
6. 暗褐色土 ローム粒若干含む。粗い堆積

} 011(溝)の覆土

008B住居跡(次頁より)

A-A'

1. 暗褐色土 ローム粒若干含む。粗い堆積
2. 暗褐色土 ローム粒を混じえる
3. 暗褐色土 ローム粒、径1cmのロームブロックを多く含む
4. 黒褐色土 ローム粒多い。径1~2cmのロームブロックを若干含む
5. 黒褐色土 ローム粒混じえ、径1~2cmのロームブロックを多く含む
6. 明褐色土 ローム粒、径1~2cmのロームブロック多く含む
7. 暗褐色土 非常に粗い堆積
8. 暗褐色土 ローム粒多い。非常に粗い堆積
9. 黄褐色土 径1~2cmのロームブロック主体

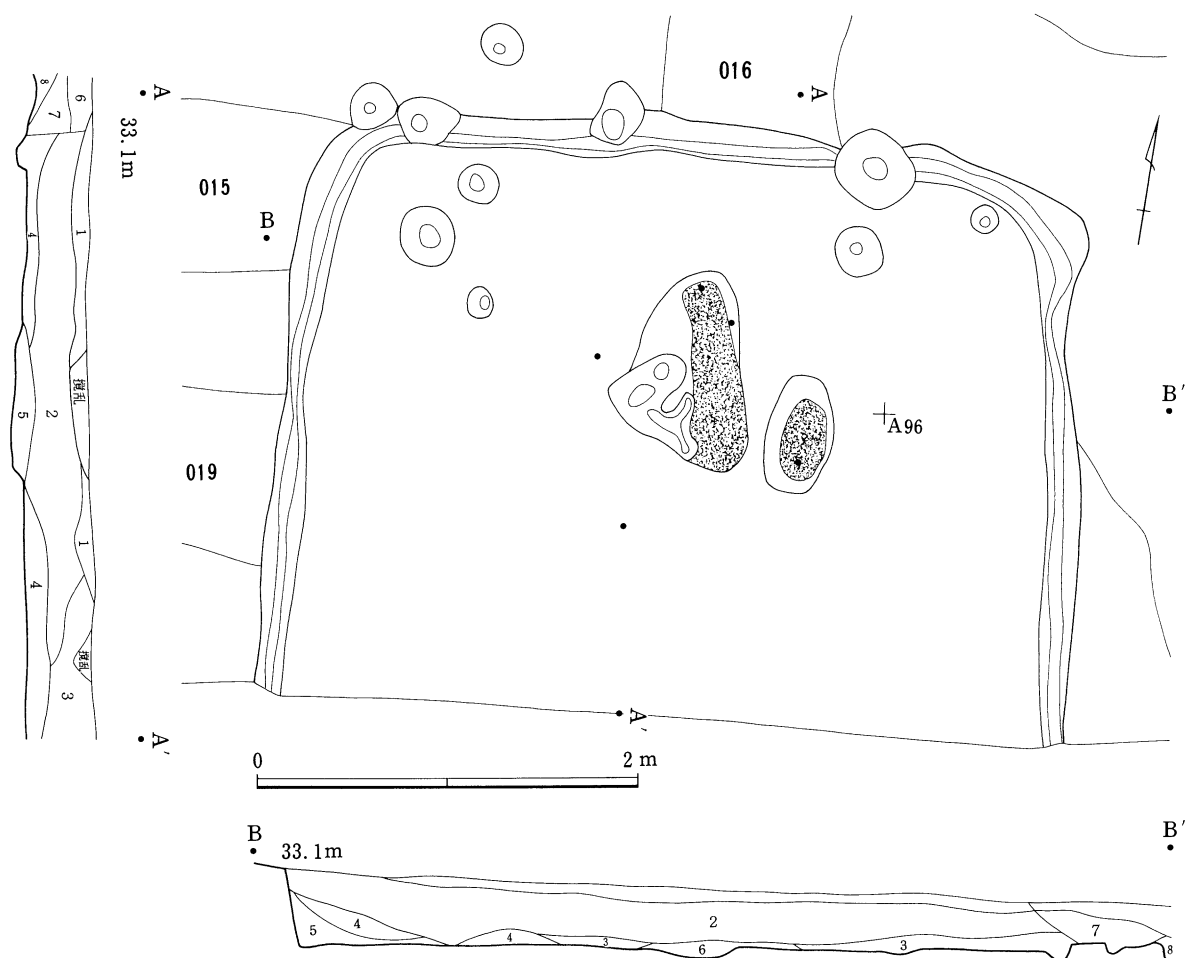


第15図 008B住居跡実測図(s = 1 / 40)

008B住居跡

B-B'

- |         |                         |          |                            |        |
|---------|-------------------------|----------|----------------------------|--------|
| 1. 暗褐色土 | ロームブロック、ローム粒、焼土粒を若干含む   | 4. 暗灰褐色土 | ローム粒を含む                    | } 008A |
| 2. 暗褐色土 | ローム粒、ロームブロックを含む         | 5. 暗褐色土  | ロームブロック、ローム粒、焼土粒を若干含む      |        |
| 3. 暗褐色土 | ロームブロック、ローム粒、焼土粒を含む。炉覆土 | 6. 暗褐色土  | ローム粒、ロームブロック多量に含む。しまりあり。貼床 |        |
|         |                         | 7.       |                            |        |



第16図 014住居跡実測図(s = 1 / 40)

014住居跡

A-A'

- 1. 黒褐色土 粗い堆積
- 2. 暗褐色土 ローム粒多く含む。径3 cm前後のロームブロック若干含む
- 3. 明褐色土 ローム粒、径0.5~2 cmのロームブロック多く含む。粗い堆積
- 4. 暗褐色土 ローム粒を若干含む
- 5. 暗褐色土 焼土粒多く含む。炉の覆土
- 6. 暗褐色土 ローム粒を含み、径1 cm前後のロームブロックを若干含む
- 7. 明褐色土 ローム粒、径5 mm前後のロームブロックを多く含む
- 8. 黄褐色土 ローム粒、径1~3 cmのロームブロック多く含む

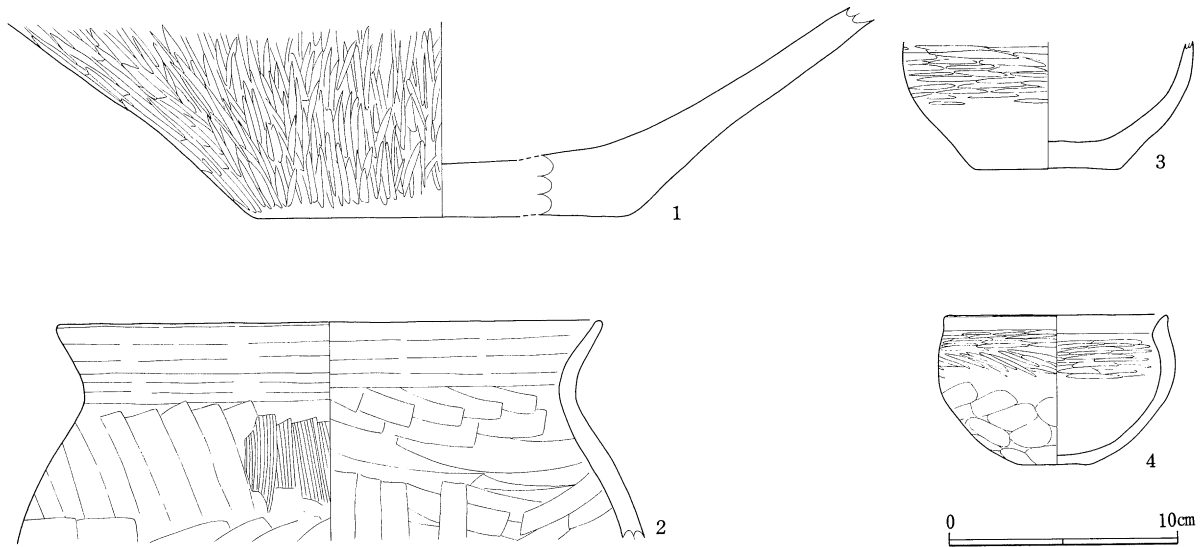
B-B'

- 1. 黒褐色土 粗い堆積
- 2. 暗褐色土 ローム粒多く含む。径3 cm前後のロームブロック若干含む
- 3. 暗褐色土 ローム粒を若干含む
- 4. 赤褐色土 焼土粒多く含む。ローム粒若干含む
- 5. 焼土 (二次的に廃棄されたもの)
- 6. 暗褐色土 焼土粒多く含む。炉の覆土
- 7. 明褐色土 ローム粒、径1~2 cmのロームブロック多く含む
- 8. 黄褐色土 ローム粒、径3~4 cmのロームブロック多く含む

} 016(溝の覆土)

014 住居跡

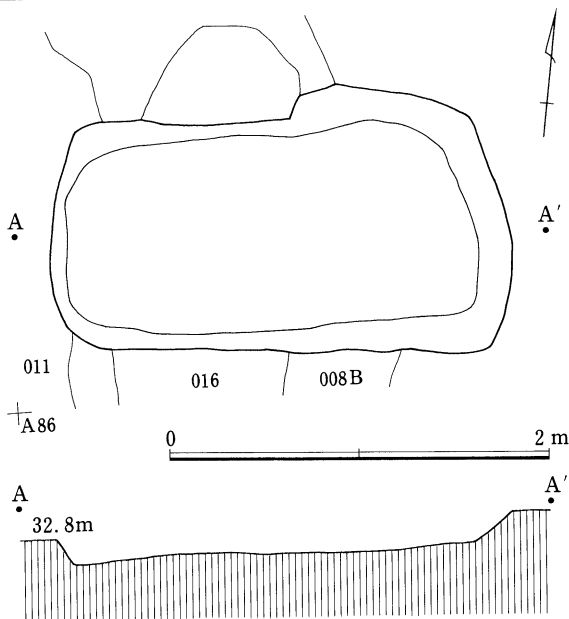
本調査区の南端に位置し、遺構の南半は調査区外に続いている。壁の一部が、溝により切られているが、床面には及んではない。形態的には、隅円方形を呈し、北辺で一辺約4 mである。周溝は全周し、炉址は2箇所検出されている。北寄りほぼ中央部分と、そのすぐ東側の部分である。柱穴は北側壁寄りの部分で検出されているが、住居全体の位置からみるとやや西に偏っている感がある。遺物は、炉址の周辺で出土した。そのうち、図示しうる物は4点である。何れも、五領式の範疇で捉えられる物であろう。



第17図 014出土遺物実測図

第4表 014 出土遺物観察表

No.	種類	器種	部位	法量・形態の特徴	技法	胎土	色調		備考
							内面	外面	
1	土師	壺	底	底径14.5	内面:整形不明瞭 外面:縦位のミガキ	砂粒顕著	赤褐~黒褐	赤褐	焼成甘い
2	土師	甕	口縁	口径20.6	内面:横位のナデ・横位のケズリ・縦位のケズリ 外面:横位のナデ・縦位のハケ→縦位のケズリ・横位のケズリ	砂粒やや多い	暗赤褐	暗赤褐	
3	土師	鉢	胴~底	底径6.0	内面:円方向のケズリ 外面:横位のミガキ	微砂粒多く含む	赤褐	赤褐	胴部外面赤彩
4	土師	鉢	完形	器高5.9口径8.8底径3.0	内面:横位のミガキ・横位のナデ 外面:横位のミガキ・やや右下りのミガキ・ケズリ	赤色粒子を多く含む	暗褐	暗褐	



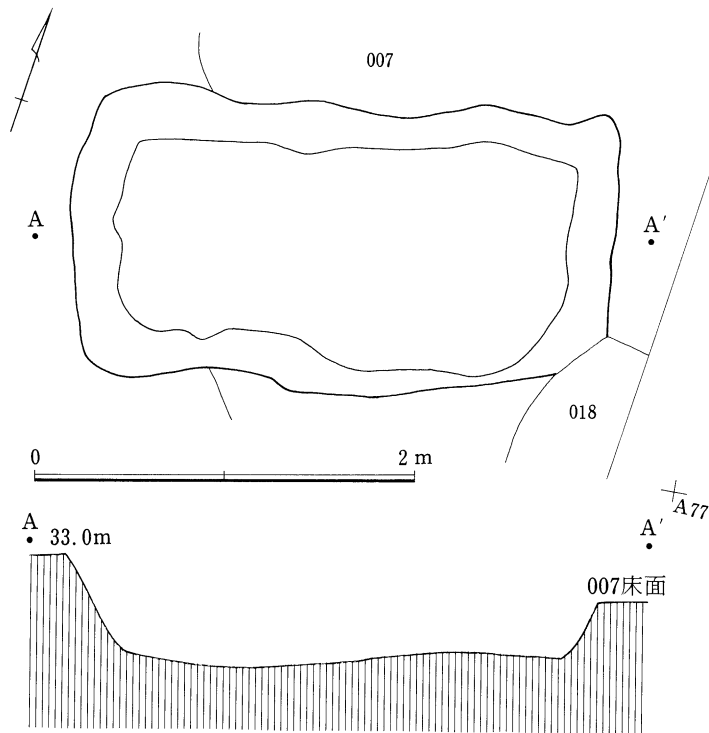
第18図 009土坑実測図(s=1/40)

### 009 土坑

008B住居跡の東壁を壊して作られている土坑である。上端幅で、長軸約2.4m、短軸約1.2mを計りやや歪んだ長方形を呈する。深さは、確認面から約20cmで、底面は比較的平坦であるが、若干、西側に向かって下がっている。

この遺構からは、特に良好な遺物の出土は認められなかった。

周辺の溝との関連性も見出し難く、単独の土坑として位置づけられるが、それ以上の性格規定はし難い。ただし、後に触れる010土坑と形態、主軸方向が近似することだけは、指摘しうる。



第19図 010土坑実測図(s = 1 / 40)

### 010 土坑

007 住居跡の南西に作られているものである。上端幅で長軸約2.8m、短軸約1.6mを計る。形態的にはほぼ長方形を呈している。底面はほぼ平坦であるが、若干、西側の方が下がっている。掘り込みの深さは、確認面から約50cmである。

009 土坑同様、良好な遺物の出土は認められず、周辺の溝との関連性も伺えないところから、単独の土坑と考えるべき。なお、本遺構の南東隅を切っている土坑(018)については、覆土の状況から、いわゆるイモ穴と判断された遺構であることを、ここで付け加えておく。

### 溝状遺構

これまでの住居跡に関する記載のなかでも見られるように、本調査区においては、多くの溝状遺構が交錯していた。その配置状況については、図示した通りであるが、それぞれの性格については、不明といわざるを得ない。ただ、少なくとも、硬化面を形成している遺構は、認められなかったので、道として捉えられるものではないことは、確かであるといえる。したがって、何らかの区画溝と考えるのが、自然と思われる。あまり、強引な解釈をする必要もないと思われるが、たとえば、011、016、019で方墳の周溝と捉えられる可能性があり、同じく、006は北区の002と組合わさって、方墳を形づくることになるかも知れない。

### 006 溝

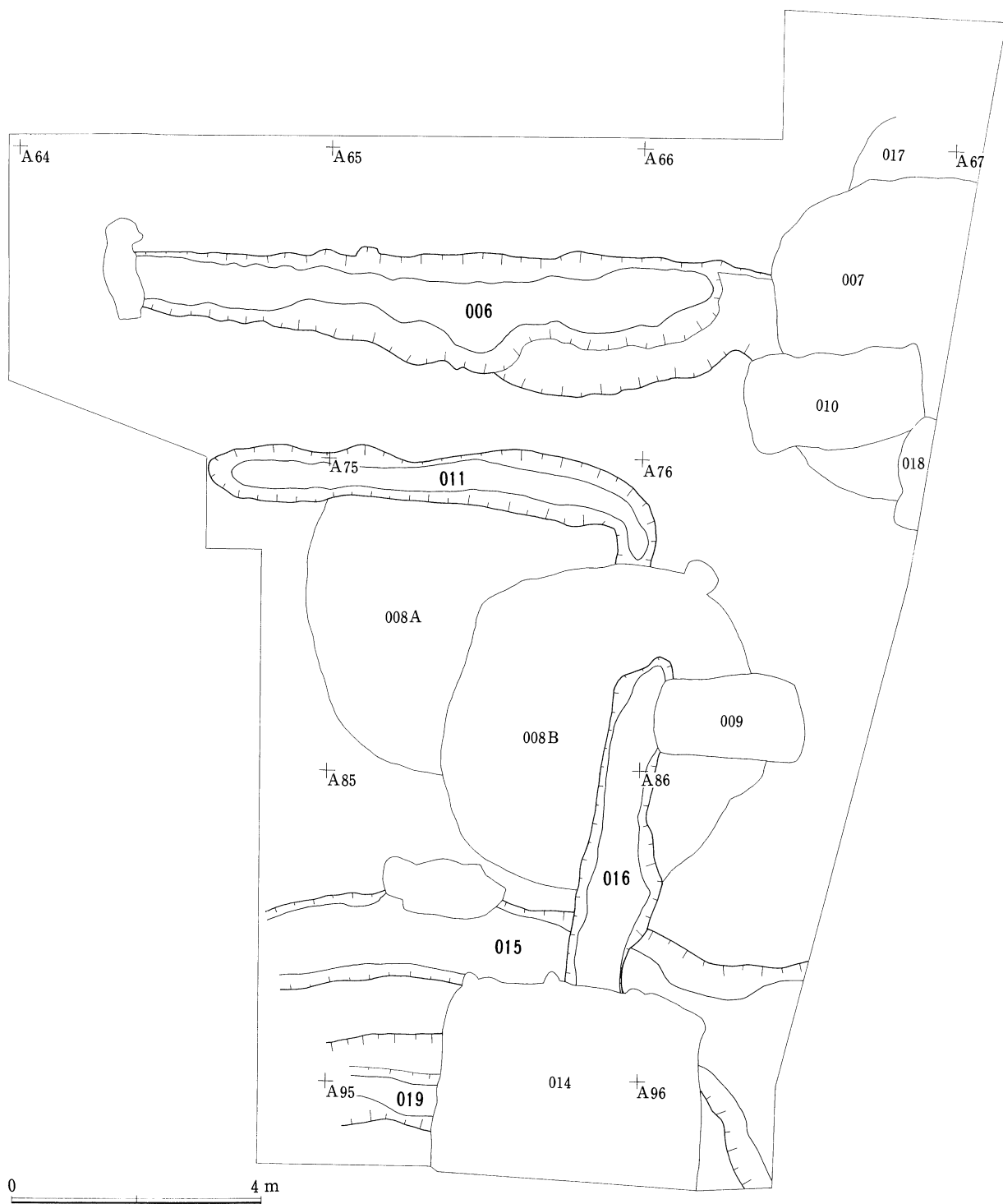
本調査区の北寄り所在し、ほぼ南北方向に走っている。西端は小土坑による攪乱を受けており、東端は007住居跡にかかっている。長さは約10m、上端幅は広いところで、約2.4m、狭いところで、約90cmである。東側ほど幅が広くなり、立ち上がりの傾斜も緩くなるのが認められる。

### 011 溝

006の南側にこれとほぼ並行するかたちで検出された。約7m東伸したのち、南方、016の方に向きを変える所まで検出されたものの、その先は、おそらく008の覆土中で取まってしまっていたと思われる。上端幅は、全体に1m前後である。

### 016 溝

008B住居跡のほぼ中央を南北に貫き、南端は014住居跡の覆土の中に取まっている。残存部分で長さ約5.4m、上端幅は0.8m~1.0mで、規模的には、011に類似する感がある。



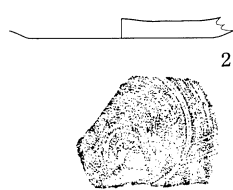
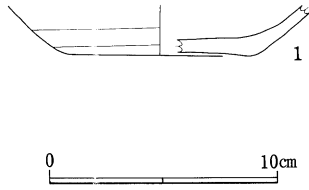
第20図 溝状遺構配置(s = 1 / 100)

**019 溝**

本調査区の南西隅部分で検出され、東側は014 住居跡の中に取まってしまふものである。検出しえた部分は長さ約2 mの部分にすぎない。上端幅は約1.4 mである。

**015 溝**

008B 住居跡と014 住居跡の間を東西に走り西に行くにしたがって、幅を広げる。上端幅は西端で1.3 m、東端で4.4 mである。



### 021 土坑

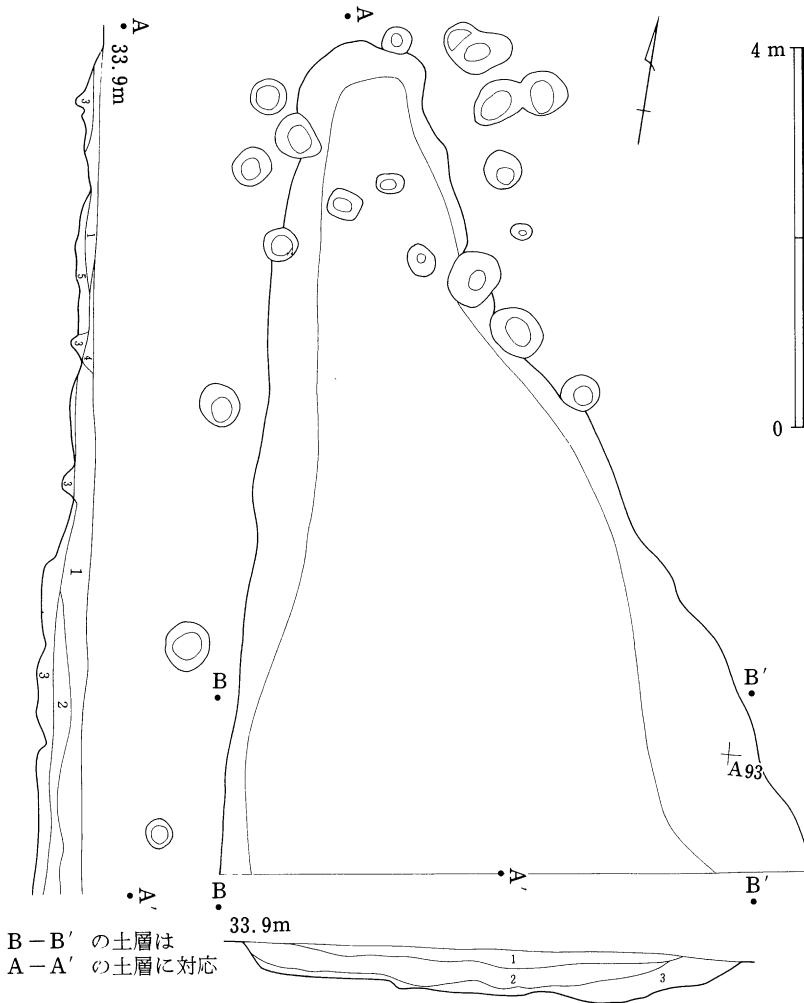
これまで述べて来たような遺構のほか、図示した様な遺物を出土した、性格不明の土坑がある(遺構の位置は全体図参照)。遺構の一部のみの調査であったので、詳細は不明であるが、ほぼ同時期と思われる遺物が出土して

第21図 021出土遺物実測図

いるので、報告だけしておくこととする。遺物は、何れもロクロ土師器である。

第5表 021 出土遺物観察表

No.	種類	器種	部位	法量・形態の特徴	技法	胎土	色調		備考
							内面	外面	
1	土師	坏	底	底径7.5	内面:ヨコナデ 外面:ヨコナデ・回転ヘラケズリ(底部および底部外周)	微砂粒多く含む	赤褐	赤褐	ロクロ土師
2	土師	坏	底	底径7.8	内面:ヨコナデ 外面:ヨコナデ・回転ヘラケズリ(底部のみ)	微砂粒多く含む	橙	橙	ロクロ土師



### 3) 南西区

#### 020 土坑

この調査区では、この土坑とピット列が検出された。それぞれ性格は不明である。土坑は、北から南に向かって幅を広げ、調査区の南端部分では、幅6mを計るに至っている。深さは、約50cmであるが南あるいは西の方ほど深さを増している。

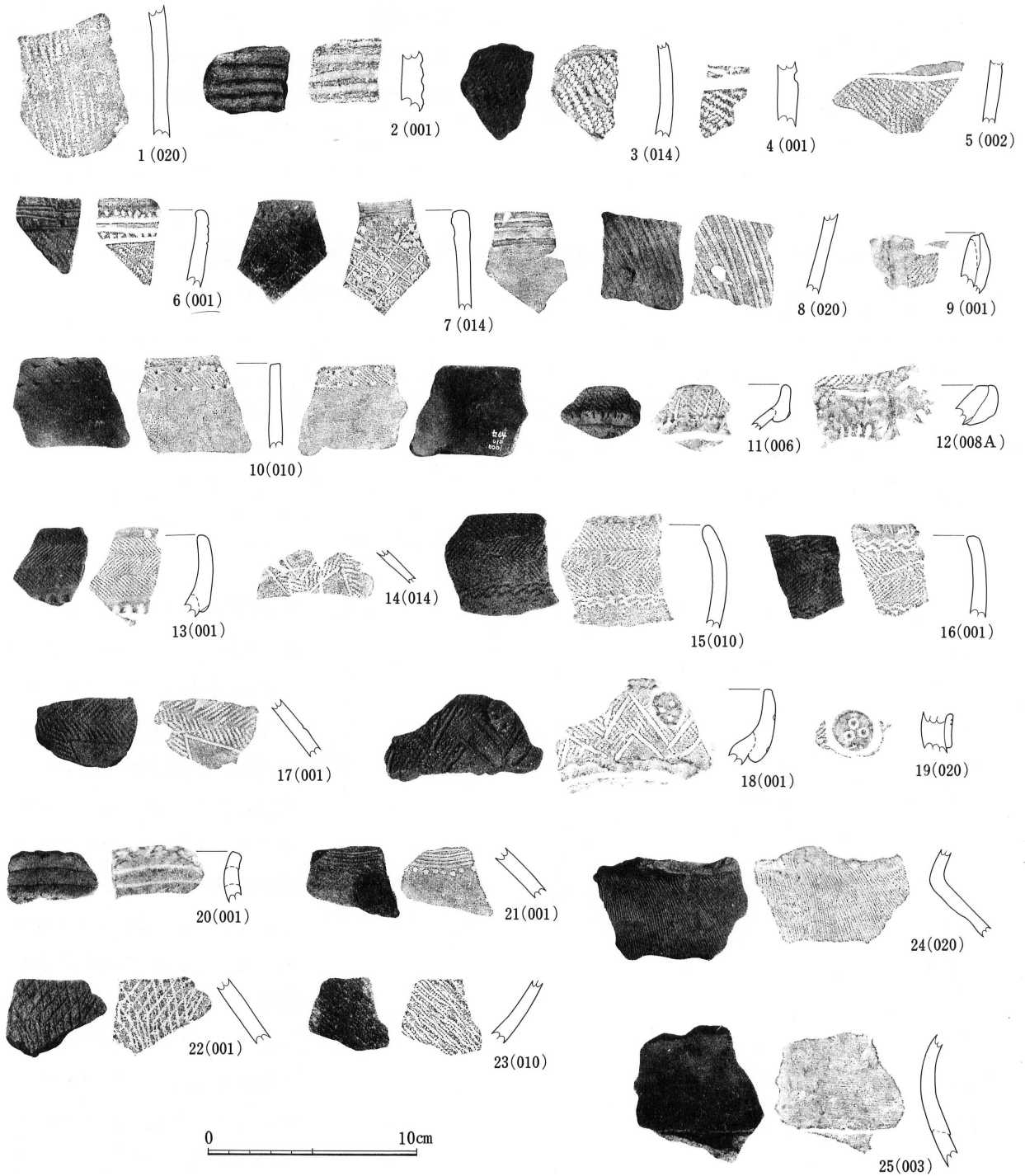
この土坑の北方でピットが比較的集中して検出されており、また、西側ではこのどこの掘り込みに平行する形でピットが並んでいるのが検出された。

#### 020土坑 A-A'

1. 暗褐色土 ローム粒多く径0.5cmのロームブロックを若干含む
2. 暗褐色土 1に近似するが、黒色を帯びる
3. 黄褐色土 径2~5cmのロームブロックを主体とし、褐色土を混える
4. 褐色土 ローム粒を含む。粗い堆積。後世の攪乱
5. 暗褐色土 ローム粒多く含む。非常に粗い堆積

第22図 020土坑実測図 (s = 1 / 80)





第23図 その他の出土遺物拓影図(カッコ内は出土遺構番号)

両者の関連性については判断材料をもたないが、まったく偶然に、掘り込みとピット列が平行することも考え難いところである。

また、良好な遺物の出土は土坑、ピット列双方において認められず、時期的にも不明といわざるを得ない状況であった。

#### 4) その他の遺物

各遺構の項で報告した遺物のほかに、図示した様な破片資料が出土している。出土遺構は図中に示

した通りであるが、必ずしもそれらに伴う物ではない。1～8は縄文土器、9～23は弥生土器の壺類、24・25は甕の破片資料である。それぞれの特徴については詳述しないが、10については、位置づけが不明である。口唇部直下に表裏ともに細縄文を施し、その縄文部をはさんで刺突が巡らされるものである。今後の類例の増加を待ちたい。

#### 4. ま と め

今回は、僅か650㎡の調査であったが、姉崎天神山古墳に隣接する集落の一端を伺い知ることができた。当初予想されなかった、宮ノ台式の一括資料の出土も、今後の付近一体の歴史を復元していく上で、貴重な成果と言える。集落全体の実体を把握するまでには至らなかったが、この点に付いてはいかんともし難いところである。住居の時期については、確実に相伴するとし得る土器の出土がほとんどない状況であったが、014住居跡を除いて、いずれもが弥生時代中期～後期に属するものと考えておきたい。したがって、古墳群形成に先立つ集落の一部が、今回の調査で明らかになったことになる。隣接する姉崎天神山古墳や、今回周溝のみが検出された古墳との関係は残念ながら明らかにしえなかった。ここでは、今後の検討課題も含めて、若干大風呂敷を広げつつ、私見を述べ、先学諸氏の批判を仰ぎたい。

当地域の歴史を考えていく上で重要なのは、やはり養老川との関係であろう。環境のみが全ての歴史事象を規定するものではないことは、いまさら言うまでもないことであるが、生産基盤として低地を取り込む段階においては、その占める部分は大きくならざるを得ない。その基盤の安定性という点においては、左岸が優っていたことを、古墳群の形成状況から見てとることも一つには可能である。しかし、可耕地が眼前に広がっているだけの状況のみでは、歴史の展開は考えられないのであって、その耕地をとりこむ方策が不可欠である。それらを可能にする一つの契機として農具のありかたも今後十分検討していく必要がある。一般に弥生時代の到来とともに、鉄器が伝わったとされているが、その量的な実態については、鉄が劣化し易いという理由もあって、把握しきれないところもおおいのではないと思われる。しかし、以下に漠然とした私見を述べるが、弥生時代以降においても木器の占める部分が高かったのではないか。最小限の鉄器は保有していても、農具にまでは鉄の流通が及ばなかったのではないかと感じられる。さらに、想念を巡らせば、鉄器を目の前にしながら、それを木で作らざるを得ない状況にあったと思われる。したがって、そのための工具をいかに確保し続けるかが、差し迫った要請であって、さらには、いかにその流通のルートを確保するかが、当時としては重要な首長の役割であったと考えられるのである。その流通の具体的内容については成案はもたないが、物と物との交換を通してか、あるいは、人と物との交換であったかもしれない。現在のように貨幣経済が発達したもとにおける流通のありかたと、それ以前の流通のありかとは、相当の相違があったことをふまえておく必要もあろう。

社会の変化は、広い意味での「交通」の変化により、もたらされる。今回、出土した宮ノ台式土器はこの地域の弥生文化の到来を象徴するものである。その後の展開については、今後の課題として残るが、上に述べたような視点を保持しつつ、養老川左岸の歴史、さらにはいわゆる「国分寺台」の所在する右岸の歴史を見ていく必要がある。



001・002全景



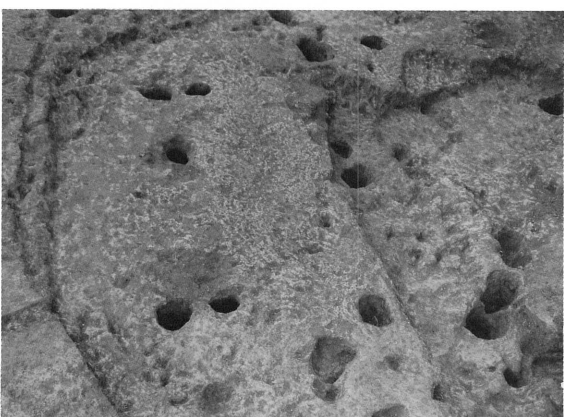
007遺物出土状況



007完掘後全景



南東区遺構配置状況



008A全景



008B全景



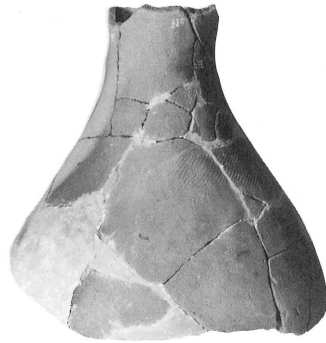
014全景



020全景



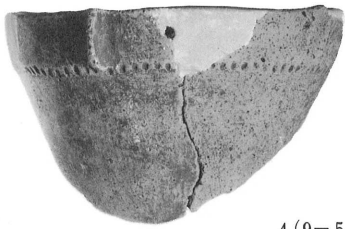
1 (9-1)



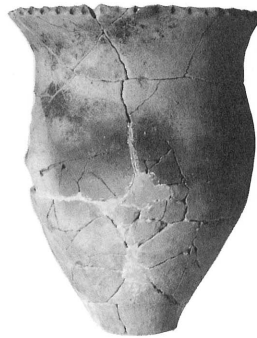
2 (9-2)



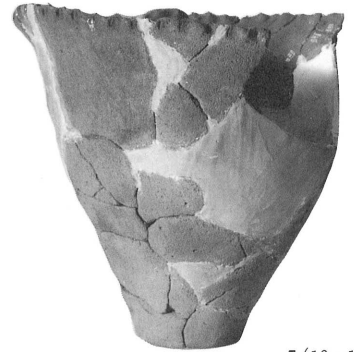
3 (10-10)



4 (9-5)



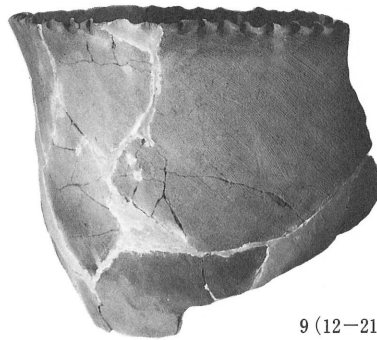
6 (10-15)



7 (10-16)



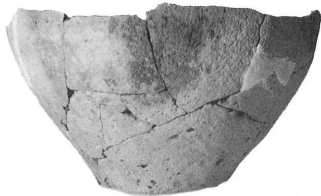
5 (9-3)



9 (12-21)



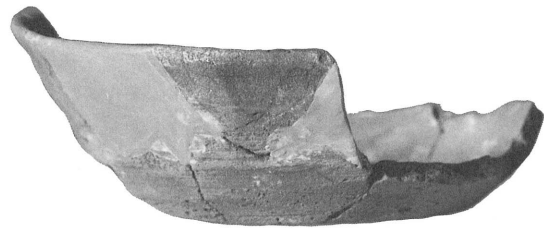
10 (11-19)



8 (10-11)



11 (17-4)



12 (5-2)

014出土遺物

001出土遺物

財団法人 市原市文化財センター調査報告書 第37集

## 市原市姉崎東原遺跡

平成2年3月23日 印刷

平成2年3月30日 発行

編集 財団法人 市原市文化財センター

発行 株式会社 新昭和住宅

財団法人 市原市文化財センター

千葉県市原市能満1489番地

TEL 0436 (41) 9000

印刷 株式会社 三陽工業

千葉県市原市五井5510-1

TEL 0436 (22) 4348